

---

# けんきゅう

はうす

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

けんきゆう

### 【コード】

N1598Q

### 【作者名】

はつす

### 【あらすじ】

とある世界のとある研究者のお話

ぶるるーぐ

夏は暑い。いくら科学技術が発達しても、そういうことは変わらない。

電気自動車が自分のいる橋の下を走っている。よく考えてみれば廃棄ガスがでていないだけ、まだマシなのかもしれない。横で回っている発電機に感謝だ。

ずどーんっ！！ どばーん！！

ジャ〇プみたいな効果音が学園都市に響く。だからって騒ぎになるわけではなく、周りの人は叫び声をあげることなく迅速に逃げていく。

効率的だ。

慣れっこなんだろう、可哀相に。

僕も早く逃げないと、巻き込まれてしまう。

なんか変だ。逃げて行く人は皆、こっちに向かって走ってくる。つまり、原因はこっちに向かって来ているわけで、さらに言うなら流れ弾（？）がこっちに飛んできてる。

ズガンッ！

また、ジ○ンプだ。

そんなバカなことを思ってた罰なのか・・・先ほどまでグルングルン回っていた風力発電機が、こっちに向かって倒れてきた。羽は安全装置が正常に作動したようでとまっているが、僕には十二分の脅威だ。

驚きすぎると、声がでない。

まだ死ぬわけにはいかない。少なくとも、HDの中身を消さない。死後にもう一度死んでしまいかもしれない。

とっさに、プロ野球選手も懂れるだろう（適当だ）飛び込み。

あつぶねええええええ。

足を掠ったよ。

羽がこっちを向いて曲がってる。尖ってる。中学生みたいだ。

「やっと見つけたわよ、お父さん」

もっと尖ってるのが来た。いや、見た目は虫も殺さないようなソフトな感じのだけれど・・・。

僕の年齢は、まだ15歳。目の前にいるご令嬢は高校生、今は有名

私立高校の制服を着ているけど服装によっては大学生でも通るかもしれない。

「まるで僕が隠れていたみたいじゃないか。少なくとも今日は、約束なんてなかったはずなんだけど。」

「ええ、その認識で合ってるわよ。でも今朝起きたときに思ったのよ。  
お父さんと映画観たいなって。」

そう言いながら微笑む。くそう、可愛いじゃないか。

「研究所でいいなら、一緒にさせて欲しいな。」

妥協案A。なぜAかというと、

「いやよ。雰囲気の写真もないじゃない、せつかくの制服デートなのよ。  
あんなところ、いつもと同じじゃない。しっかりエスコートして欲しいな。」

と言いつつ上目遣い。

断られるのがわかってるから。

さらにこの上目遣いである。かの独身貴族、次元〇介もクラッとくるんじゃないか。もう、お父さん、なんでもお願い聞いてちょう。

「仕方ないな。何の映画を観るんだ？」

イメージは、恋愛・・・いや、アクションか。

「仕方ないって何よ。・・・まあ、いいか。  
向こうで決めようと思ってるんだけど。」

計画なしか。

そついうのも、たまにはいいか。

「いつも行くところでいいかな、お姫様。」

「お父さんそういうキャラじゃないのに・・・  
たまにはいいか。今日は特別だし。」

同じようなこと言ってる。

僕、かなくみたいさ金酌大佐とメルトダウン原子崩しことむぎのしずり麦野沈利は、朝から映画館に足を運ぶ  
のだった。

## 第一話（前書き）

センター終わった。・・・色んな意味で。

## 第一話

才能は、環境が育てる。

【才能】

物事を巧みになしうる生まれつきの能力。才知の働き。

少し矛盾しているようだが、これを証明した少年がいた。父は世界で知る人ぞ知る科学者だが、血はつながっていなかった。

養父は樹形図ツリーダイアグラムの設計者を開発した。

学園都市の研究者の代表格のような人物だった。

その少年は、乳飲み子のころから養父に付いて研究所を出入りしていた。

養父を筆頭として、養父を慕った世界最高レベルの頭脳がそこにはあった。

話すこともできない頃から世界最高の研究をみてきた。

そんな彼が凡庸なはずがない。普通であることが異常だった。

初めて話した言葉はパパだったが、次の言葉は、アブソリュートシミュレーターだった。

養父が好きな話題だった。

養父にとっては樹形図ツリーダイアグラムの設計者すらも通過点でしかなかった。その世界最高のアブソリュートシミュレーターを使ってさらなる演算能力をもつアブソリュートシミュレーターを開発する。

それを数回繰り返し、「神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの、通称SYSTEM / システム」への足がかりを見つけようとしていた。

「人の脳はコンピュータをはるかに越える性能を持つ。私は、“人の脳”をつくりたい。」

それが、まだ小さかった少年にかけた最後の言葉だった。

老衰だった。

研究所は空になった。少年だけが残った。

学園都市統括総理事長たるアレイスター・クロウリーによる配慮だった。いや、これも計画の1つだったのかもしれない。

樹形図の設計者2《ツリーダイアグラムツィ》の開発。

たった一人、それもまだ5歳の幼児といってもよい子供によって開発された。

開発直後、彼は発表する前にアレイスターにテレビ電話をした。養父用の直通電話だった。

「予定どおり仕上げたよ。研究所として正式に認めて予算頂戴。」

「もう手配は、すんでいる。これからも頼むよ。」

アレイスターの姿が画面に映る。逆さまだが。

「うん。理事長が前に言っていた、裏の監視網？  
あれも考えがあるんだ。」

少年はニヤニヤしながらあつつぱく語る。

「頼もしい限りだな。」

科学サイドは、そういう所が弱点となることが多い。」

「魔法？ 妄言だと思ってたよ。」

目がキラキラしている。

「魔法ではなく魔術だが・・・オカルトということでは同じか。  
君は使えないだろう。」

「能力者だから？」

あっ、そうそう。置き去り（チャイルドエラー）を何人か見繕って  
送ってね。」

子供ゆえだろうか、もう魔術の話に興味はまったくないようだ。  
そして、アレイスターは珍しく驚いたような顔をした。

「モルモットか」

「ちがうよ、“神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの”、“人間を越えた身体を手にして、神様の答えにたどりつく”だよ。」



## 第二話（前書き）

帝督と変換するのがめんどい

## 第二話

3人の少年と1人の少女が真つ白な部屋にいた。部屋は、床におもちゃや、DVD、CDが散乱している。3人の少年の内2人と少女はソファにすわり、最後の少年は白衣を着て部屋の真ん中の椅子に座っていた。椅子に脚はなかった。ほんの少し浮いている。この施設内でのみ使えるこの椅子を少年は愛用していた。

「でさあー、この部屋がなんで白いかって言うと、僕が白LOVEだからなんだよ。」

瞑想？  
想像？

思考、うん、思考だね。なんか考えるとき此処にくるんだよ。」

そして、饒舌に話していた。

「もう、話なんていいんじゃないか？  
検査するんだろ。」

白衣の少年よりは年上に見える茶髪の少年が沈黙を破る。  
他の2人はとりあえず観察といったところだろうか。

「んっ！ 君は確か垣根提督だね。」

椅子がくるくる回る。

「垣根帝督だ。ムカつくな、お前。」

青筋を立てている。

「何だ、提督じゃないのか。」

偽提督なのに、偉そうだね。

僕は大佐だぞ。」

ブンブンという擬音語が聞こえてきそうだ

「何の話だ？」

ガキに付き合ってもらえないとばかりに、ヤレヤレと首を振る。

「名前だよ、名前。」

今まで、何の話をしてたんだい？まったく。

年上の癖に、人と話も満足にできないのかい？

僕の名前は、金酌大佐だ。」

帝督の真似をする大佐。

「そうならそうと言え！！」

叫んだ瞬間、帝督の背中から黒い翼が飛び出す。キレたのか、と帝督以外のそこにいた全員が思ったが、まず大佐が次に白い髪の少年が最後に品の良さそうな少女が異変に気づく。

様子が変だ。

先ほどまで自信满满といった余裕を浮かべていた顔が苦しそうに歪んでいる。

「暴走。」

白髪の少年が呟く。それと同時に少女はソファから飛び上がり、ドアのほうに駆け出す。

少女は未だレベル3。たしかに一般人と比べれば彼女には大きな力がある。

ただ3人が大佐に会う直前、垣根は自己紹介で言っていた。自分はレベル4だと。

レベルだけで判断するなら、自分は格下。しかも周りの少年たちを頼ることはできない、それほどの信頼関係などではない。とりあえずこの部屋は危険だ。

そう判断し、ドアまで来たが開かない。

「なっ！！」

ドアノブをガチャガチャと回そうとするが、鍵がかかっている。

「大丈夫だよ。」

のんきな声が聞こえてくる。大佐の声だ。

「うっさい！」

少女はこうやって生きてきた。

どうしようもない理不尽からは、這ってでも逃げた。

研究所では、死にそうだと判断した研究はあらかじめ用意しておい

たチャイルドエラーの友達に任せた。食べ物いけにえが手に入らないときは、能力で脅して奪い取った。

「だから、大丈夫だつて。」

そう言つて、大佐はおもちゃのようなボルトアクションライフルを構えてたいして狙いもつけずに撃った。

バンッ！

ただ、飛び出したのは鉛球でなく針。首の静脈あたりだろうか、まっすぐ垂直に刺さっている。

少女は音に驚いて少しビクツと震えたが、大佐や白髪の少年は微動だにしない。

黒色の翼がすぐに消え、ゆっくりと帝督がソファに沈む。

「これさえなければレベル5なのに。」

ヤレヤレと首を左右に振る。まだ物真似を続けるようだ。

「此処に連れて来られた君たちにはある共通点がある。

暴発を起こしたりや限界にぶちあたった能力者。さらにいうと、僕が欲しいと思つた今後昇華するであろう能力者。

僕が、君たちを超能力者（レベル5）まで連れて行ってやる。

「・・・ちゃんと自己紹介しとこうか。僕は、金酌大佐だ。この第703研究所所長をしている。」

偉そうに胸をはる。

「・・・アクセラレータ一方通行だ。」

渋々といった感じ。

「原子崩し（メルトダウン） 麦野沈利よ。」

睨むように大佐と一方通行を見る。

「では、これから僕のことをお父さんと呼ぶように。」

「「は？」」

「・・・」

茶髪の少年、帝督はずっと眠ったままだった。

### 第三話

茶髪の少年が、昨日自分に割り当てられたであろう部屋で目が覚めた。昨日の白い趣味の悪い部屋よりもよっぽど普通で、質素な部屋だ。少年の趣味になかなか合っている。

それでも、茶髪の少年、垣根帝督は朝から機嫌が悪かった。過去最低（最高？）と言ってもいいだろう。

ム力つく変な奴にからかわれ、“暴走”してしまった。

能力をきちんと使いこなせていない。帝督はそんな自分が嫌いだった。

コンプレックスか。

彼の能力である未元物質ダークマターは能力者の中でも非常に珍しい。いや、帝督自身書庫バンクにアクセスしたことはないのだから、ただしいかどうかは知らないが、おそらくただ1人だ。

強力な力ではある。ただ強すぎたのかもしれない。

未元物質ダークマターは、実に応用が利く能力だ。

ただその分、演算が複雑でさらに未元物質ダークマターはこの世界に存在しない、もしくは未だ発見されていない物質を扱う能力だ。他にこの能力を使う能力者もない。

他の能力者、例えば肉体重再生オートリパリスや念動力テレキネシスなど言い方が悪いかもしいが、たくさんいる能力者もしくは現象がわかりやすい能力者の場

合、他の能力者の演算方法等を参考にしたりコンピュータで演算の最適化を行うことで自分の糧にすることができる。

まあ、もっとも彼の場合はプライドが邪魔をして他の能力者に教えるを請うようなことはしないだろうが。

帝督はイライラを隠すこともなく、荒っぽくクローゼットを開け自分のために用意されたであろう服を着た。

その服が自分の趣味に合っている事がより彼を苛立たせた。

#### 閑話休題。

白髪の少年、アクセラレータと、彼より少し年上に見える少女、麦野沈利は大量に用意された図面を見ていた。

リビングのような部屋の真ん中にある机に並べられている。この部屋も奇妙で、机が部屋の5割以上を占めている。

部屋が小さいわけではなく、机が大きすぎるのだ。

アクセラレータはこの部屋に案内された時、

「この机、真ん中のほう使わねえだろが。」

と呟いた。

図面は大佐いわくこの研究所の設計図らしい。

アクセラレータが図面に一通り目を通したらしく図面を机のほうに投げた。

何枚もの紙が舞う。

「ああーっ!!」

あんた、自分が見終わったからって捨てるのやめなさいよ!!

ちよつと置くだけでしょうが。だいたい、これ後であいつに返すんだよ。  
分かってる?」

少女、吼える。見方によってはヒステリックにも見える。

少年、無視。

先ほどから何度もこの光景が続いている。

少年はずっと考えていた。

何故、この程度の監視なのか。

何故、部屋の説明を図面で正直にすべて教えるのか。

何故、自分は此処にいるのか。

わからない。

大佐は彼をレベル5にしてやると言っていたが、彼はそもそもレベ

ル5なのだ。

隣の少女は知らないだろうが……。

ベクトル（向き）の反射。

自分の体表面に触れたあらゆるベクトルを反射する。それが例え、熱や光や運動や放射線であつても。

しかもそれは、無意識<sup>フルオート</sup>下で起こる。

核兵器を打ち込まれても無傷。

現在、レベル5にて序列第1位。これ以上高位があるのか。最強ではなく無敵になることができるのか。

……絶対能力者（レベル6）、いやありえない。  
あんなガキにできるはずがない。

「ねえ、聞いてる？」

ゆさゆさと揺られ、話しかけられていたことに気づく。  
五月蠅かったから空気の振動を反射していたのだった。

「あアン？」

感じ悪、と呟いてから少女が先ほどから話していたであろう会話内容をもう一度繰り返す。

「なんで、紙なのかな？」

学園都市でこんな20世紀前半みたいなことさせられるとは思わなかったわ。」

そんなこともわからねえのか、そんな顔を露骨にする。

「その顔、ムカつくんだけど。」

「ハッ、だからなんだってんだよ？」

・・・紙の理由は、情報漏えい対策だろうな。」

めんどくせえ、とばかりに目を瞑る。

なるほど、と言いながら図面に目線を戻した少女も同じようなことを考えていた。

マルチダウナーは、正式には粒機波形高速砲と言い、電子を波と粒子のどちらでもない状態に固定し、自在に操る能力である。結果として、固定された電子は、ほとんど質量を持たないにもかかわらず「壁」として機能し、その「壁」を動かすことで圧倒的な破壊を引き起こすことが可能だ。

だが、はっきり言って使い勝手が悪い。

応用も利かない、さらにリミッターを設けなければ反作用で自分が傷つく。

単純に威力を上げるしかない。

それができるなら此処にいてもいいだろう、そう考えていた。

第三話（後書き）

次は九日です

## 第四話

少年が脚のない椅子に座っている。椅子は浮遊していて、少年が手を伸ばしたりすると少し揺れる。

少年は、大きなガラスの前にいた。そのガラスは、外（学園都市の外部）の水族館にあるようなもので厚く、内外からの衝撃に耐えられるようになっていてる。

もつとも、内からの衝撃はないだろうが。

なぜなら、内には、とある大型機械だけだからだ。

樹形図ツリーダイアグラムの設計者、この少年、金酌大佐が開発した次世代機が宇宙に打ち上げられたことによって代わって地表に戻ってきたのだった。

大佐は昨日子供たち（自分もだが）を迎える以外にも、この義父の形見を預かることにもなっていた。

預かると言っても、所有権は当然のことながら統括理事長にあり、本体を預かっているだけ。

整備を任せられるというのと、この研究所の場所が普通の人間には分からないという理由からだ。

大佐は、1日3時間だけが使用権を得た。

今は、帰って来た樹形図ツリーダイアグラムの設計者をこの研究所のメインコンピュータに接続しているところだった。

「まったく、このくらいアレイスターがやってくればいいのに・  
」

ぶつぶつ文句を言いながらも、よどみなく手が動いていく。

目の前にある手製のオリジナルキーボードを操作する。外部（学園の外）にあるキーボードとはアルファベットの並びも形状すらも異なるそれを慣れた手つきで叩く。

場所は変わって、机の部屋。

「あいつは、どこに行ったんだ？」

茶髪の少年、垣根帝督が少女に訊いた。

別にもう一人の少年でもよかったのだが、話しかけんじゃねえというオーラを出していた。しかし、麦野も

さあ？ そんなことより、これ見てなさい。と紙の束を突き出す。

先ほどまで一方通行や麦野が見ていた図面だった。

「この研究所か？」

図面を視て、頭の中で三次元的に構築。自分のがつい先ほどまで居た部屋やこの部屋と一致することを確認した。

麦野は、こんなチャラチャラした奴でもレベル4だったと感心する。そうらしいわ、と感心していることを隠すように素っ気無く返す。

「だが、少し違うな。」

と図面を観ながら呟く。

えっ、と麦野は驚きの声を上げ、一方通行はむくりと体を起こす。

「きちんと読めるの？」

2人、麦野と一方通行は専門知識を持っているわけではない。

ただ、今日起きた場所の形状や廊下、この部屋の大きさなどから推測された地図を頭にインプットしただけ。

帝督は読める。

彼は裏の仕事を引き受けた際、こういうことを習った。もっとも作戦は別の能力者、透視などに任せていたため、そこまで詳しくはないにしても、他の2人に比べれば多少は詳しい。

「おそらくだが、隠し部屋が存在する。」

そう言って、提督は絵も何も掛かっていない壁を見つめた。

その通りだよー、と間抜けな声がする。

扉の設置されていない入り口を通して、ボタンを留めずに白衣をだらしなく着た少年が入ってくる。

「はあ？」

一方通行が苛立った声を出す。華麗(?)にスルー。

「お父さんだ、子供たちよ。」

よく気づいた、飴ちゃんをあげよう。」

そう言いながら、ズボンから黒飴を取り出す。

おばあちゃんが持っていていそうなそれを、帝督に差し出す。

帝督もそれを、華麗(?)にスルー。

大佐は、笑顔で帝督の頬に黒飴を押し付ける。

グリグリもしくはゴリゴリという音が聞こえるくらいに。

「いいかげんにしろっ！」

帝督は、大佐の手を振り払おうとしたが、大佐は、ウニョウニョと気持ち悪い奇妙な動きで回避しカウンターを繰り出す。

「螺旋丸！」

抗議した帝督に外部の某有名マンガの奥義がきまった。

ブチッという音が聞こえた(気がした。)大佐のテヘツという愛想笑いでも誤魔化すことができない。

「ぶっ殺す!」

## 第四話（後書き）

落ちなかった。

二次試験が終わるまで少しばかり更新を待っていてください。

第五話（前書き）

短いです

## 第五話

別に何もなかった。いや、収集がつかなかったわけじゃない。絶対に違う。

能力者3人は、大佐に案内されて隠し部屋に来ていた。

隠し部屋？

あるよー

じゃあ、行こうか。

そんな流れだった。全然、隠れていない。

ちなみに、隠し部屋への通路が、提督が見ていた方向とは真逆だったのはご愛嬌だ。

まあ、他の2人からは白い目で見られていたが。

通路は、隠し部屋らしく薄暗い廊下だ。

消費電力からこの部屋をばれないようにしている、ということらしい。

しかし、大佐の性格から考えると、ただ単に雰囲気作りかもしれないのだけれど、3人は黙って大佐の後をついていった。

警戒しているのかもしれない。

木の廊下で現代的な洋風のフローリングと言うよりは和式の縁側の

ような造りだ。

非常用なのか、靴を脱ぐ必要もなかった。

所々に扉があつたが、4人が近づくと音をたてないように絶妙なタイミングで開き、歩みを止める必要はない。

「さあ、着いたよ。」

そう言って、両腕を広げる。アーハツハツとか高笑いをしていそうな様は、どこか狂氣的マッドサイエンティストの研究者っぽい。

いや実際に、ドジッ子が溝にはまるかのごとく片足がはまりきっている。

しかし、そんな大佐にツッコミをおこなうものはいなかった。

一方通行を先頭に三角形のような順に立っていた3人は、目の前にあるガラス向こうの黒い物体を見ていた。

「この研究所の秘密だよ。」

そう言いながら、くっくくくつと笑う。

黒い物体には、枝が空に向かって伸びていく大樹をイメージしたような白いロゴが塗装されている。

ツリーダイアグラム  
樹形図の設計者、学園都市が科学世界において他の追随を許さず、  
発展し続ける基礎を築いた学園都市の誰もが知っている開発。

空気中の分子1つ1つを完全にトレースするという“予言”は有名だ。

それが、こんなところにある。

「なんで、こんなモノがあるの!」

麦野が大佐のほうを振り返って、叫ぶように詰め寄る。他の2人も聞きたそうにしているため、やねやねといった風に両の手のひらを上に向ける。

ドンキー・コングのようだった。

## 第六話（前書き）

卒業式の開始と時を同じくして更新

## 第六話

しーん……、という効果音(?)が似合う雰囲気だった。

説明し終えた大佐は、チューチューとジュースを吸っている。スイカやマンゴーなど様々なトロピカルな果汁を混ぜ合わせた茶色いリキッドを旨そうに飲む。

「で、なんで此処に連れて来たんだあ。別に見せる必要はないだろうがよオ。」

アクセラレータ  
一方通行は、めんどくさそうに尋ねる。

昨日は、あまり寝ていなかったため、まだ少し眠いのだった。

「だって、君たち信じてなかったでしょ。僕が言った事。」

「「「うっ!!」「」」

3人が始めて同じ反応をしたかもしれない瞬間だった。

「お父さんって呼ばないし。」

本に載ってたんだよ、“立派な父とイージス艦”ってやつにさ。

威厳が大事なんだって。」

そして、これが1番の理由だった。

「何の話?勝手に話が進むのは、ムカつくんだけど。」

「なんか、大佐、“お父さん”って呼んで欲しいらしいよ。」

「ワケわかんねえ。」

「私も分らないって。」

3人が集まる。大佐は1人ぼつんと残された。

それは、切り札の発動を決意するにたるものだった。

「ツリーダイヤグラム樹形図の設計者、使わせてあげないよ。」

その言葉に過剰なまでに反応したのが1人居た。今この部屋に居る者の中で最もレベルの低い能力者。

「お父さん！」

麦野沈利だった。あまりの勢いに、何故かそれを求めた大佐まで引いている。

「うん、まあ、沈利から始める予定だったんだけどね。」

レベル5になると序列があるのはしってるだろ、と続ける。

「レベル4やレベル5はよく軍の戦力に例えられるけど、序列の格付けは少し違うんだ。」

上の人によると、“能力研究から生まれる利益が基準であり、必ずしも強さを表すものではない”だそうだ。

はっきり言って、原子崩し（メルトダウンナー）は威力を求めるような能力だから、期待薄だろ。

しかし、そう、しかしだ。

それでもなお、沈利がもし高位入りしたらどうなる？

予算アップ、使用時間アップ、さらには、権限アップ！

いいことだらけだろ？」

大佐は、にやにやと意地の悪い笑みを浮かべる。

「成果を示すなら、俺でもいいんじゃないか？」

と現在レベル4の提督は言うが、

「データクマター未元物質やアクセラレータ一方通行の演算は、他の能力に比べて複雑なのだよ。

だから、使用時間の延長を申請しないとイケない。

そして、それには、お土産が必要なのださ。」

なるほど、と3人が納得しようとしたが、一方通行が気付いた。

「ってことはよお。」

そのレベル3が、レベル5になるまで俺たちは何もできないのか？」

大佐は、否定してから笑顔で続ける。

「君たち、3人のレベルアップは最早決定事項だ。

僕が関わったしね。」

それは、アレイスターだって認めている。」

普段の学園都市の生活の中で、統括理事長の名前がでてくることは稀だ。

というか、普通の人は知らないことが多く、七不思議のような存在なのだ。

だが、目の前には樹形図ツリーダイアグラムの設計者がある。

それが、言葉に真実味を持たせていた。

「沈利が色々やっている間、君たちには能力を使いこなす訓練をやってもらう。」

例えば、アクセラレータ一方通行なら、反射だけでなくベクトル（向き）を自由に  
変化できるようになる予定んだけど、その力を十二分に活用して  
もらう。」

いいね、そう言って大佐は締めくくった。



## 第六話（後書き）

“立派な父とイージス艦”

北朝鮮が崩壊し、安定した生活を求めて北朝鮮難民が発生。韓国政府と中国政府は、経済の混乱を恐れ国境を封鎖する。すると難民たちは、海に出ることになり、さらに軍の装備を盗んで武装して日本にやってきた。日本政府も先の両政府と同じ対応を決定し、海上で迎撃し武装船を沈めることにした。

お父さんは常に最前線で戦ってるんだ、厨房担当だけ。

## 第七話

これからの計画を大体話したことで、今日のところは解散ということになった。

大佐は炊事、洗濯、掃除、と家事なら1人ですることも可能だったが、1人分ならという制限ある。だから、少し早くに家事モードに切り替える必要があった。しかし、いつまでもこんなことではない。

ノルマの研究だってあるし、3人の能力の研究だってある。さらに、少し前から魔術を科学的に研究することも始めた。一人では、時間が足りない。

3人もまだ子供だし、研究対象に変な干渉はあまりしたくない。

「アレを試験運用をかねて使うか・・・。」

1人、呟いた。

翌日

「ちゅうもーく！」

と大佐は、同じ部屋にいるが何故か離れて休んでいる3人を部屋の中央に集めた。

バレーボールのコート1つ分ほどの広さを持つこの部屋は、隅から

中央にくるまで少し時間がかかる。

本来は研究対象モルモットに適度な運動をさせるといふ目的（そういう意味では、この施設は収容所としての面が強い）で造られた部屋だが、最近はめつきり使われていなかった。

そもそも、何故3人が同じ部屋にいるかという点、それは朝に遡る。

3人は目覚めた直後、自身らの携帯端末の待ち受け画面が、この部屋へのルートの地図に変更されたことに気付いた。

そして、来てみたら、好きとは言えない他の能力者2人が、同時に入ってきた。

気まずい空気になるだろう。

約1名、まったく気にしていなかったが。

そして、空気の読める賢しい3人は、各々別々の所に移動し、冒頭に至るといふ訳だった。

「新しい家族を紹介しよう。」

と、大佐は、神妙な面持ちで言った。

「はあ？」

もう切れ気味の一方通行は、アクセラレータ”家族じゃねえんだよ、くそがア”と  
いった顔。

「はっはー、ご機嫌だな。」

茶柱でも立っていたか？」

大佐は、学園都市で、しかも研究者の口からは、絶対に聞けないようなことをあっさり口にした。

「気にしないでおこつよ。話が進まないわ。」

で、なんなの？

お父さん。」

と、沈利が争いにならないように、暴走を止める。

大佐の機嫌をとっておくことも忘れない。

「ふむ、そのとおりだな。」

と、大佐は納得し、一方通行は、アクセラレータ何も言わずにそっぽを向いた。

結局、両方とも子供だった。

話に戻るが、と話しだした大佐。

話中の身振り手振りが、世界に喧嘩を売った第二次世界大戦期のチヨビ髭に見えるのは、最近彼が観た映画がどつという類かを証明している。

「試験中のメイド型自立式アンドロイドを、この研究所に配置することになった。」

大事に扱ってくれ。家事等は、全て彼女がやってくれるからな。

壊すなよ。

っていうか、飯がなくなるし、風呂も沸かないし、掃除もできないからな。」

以上、と言って立ち去ろうとした大佐を、3人が無言で物理的に止める。

どう物理的かというところ、アンチスキル警備員も惚れ惚れするような寝技を、提督に掛けられてだった。

「くっ！」

親父越えかあ！！！」

「いや、違うだろ。」

冷静に受け流したアクセラレータ一方通行は、大佐の頭を躊躇いもなく踏んづけた。

「お父さんは、そんな子に育てた覚えはありません。」

「まだ、会って数日だ。そもそもテメエは、父親じゃねエ」

「そこまです。」

と、マッパ全裸の少女が、精神的に三人をとめる。どう精神的かというと、マッパ全裸なことに限る。

マッパ（音速、もしくは時速1000キロメートル）という意味ではない。何も身に着けていないのだ、いわゆる、生まれのままの姿。

その少女は、顔立ちはモンゴロイドのようだが、肌は病的なまでに白く、セミロングの黒髪がよく映えていた。

そして、一番印象的なことは、瞳だった。ガラスのような物質の赤色透明な瞳には、この場にいる少女以外の四人が写っており、尚且つ怒りに染まっている。

「自分たちの親に向かって拳をあげ、あまつさえ、頭をふむだと。

恥を知れ、痴れものが!!」

「「お前にだけは言われたくない!!」」

大佐は、一人、親という言葉に感激していた。

「こんなんが、アンドロイドかよオ。ケツ!

作った奴の頭の悪さが、うつったんじゃないか?」

「そう言うなよ、次兄、アクセラレータ一方通行。

この子は、僕が、自分で作った初めてのアンドロイドなのだよ。」

「自作?

っていうか、次兄って何!？」

そんな設定もあつたのか、と沈利は顔を顰めた。それは、これ以上付き合うのは嫌だというあからさまな意思表示だった。

「当たり前だろ、両方の意味で。」

ネジ一本、市販のものは使っていないからな。部品を作る製造機械からの製作だった。ちなみにロケットパンチはついていない。」

「聞いてないし、そんなの。」

でも、無駄に金掛かっているわねー、この子。」

沈利が、不躰な目線を少女に向ける。もつとも、少女はまったく気にしていない。

「他人が弄れないようにしたかったからな。」

と言いながら、少女の頭を撫でようとしたが、背が届かず背中をさすることにした。

この中では、未元物質タークスマタの次に背が高かった。

少女は、真っ白な頬を嬉しそうに赤く染めている。

「で、名前は？」

沈利は、少女と仲良くなった(?) ようで、髪を手で梳きながら赤い瞳を見つめ、少女にたずねる。

「我輩の製造番号は、H S 3 - 1 2 2 - 9 7である。

名前は、まだない。」

と、名作の中途半端の引用をする。

「センスは、設定し直す必要があるな。

名前を決めてほしいのだよ、君たちに。」

僕もセンスの設定がおかしくなっていてね、と大佐は、自嘲する。  
変に大人びた仕草が似合わない。

「一号機でも初号機でも、なんでもいいじゃねえか。」

興味なさげな一方通行は、アクセラレータ 適当にいう。

「興味のない振りをして、その壊滅的なセンスを隠すのは、涙をさそいます。」

アクセラレータ 一方通行の顔が引きつる。

製作者がアレなためか、容赦がない。陶器の肌を持つ少女は気する様子も無く、帝督のほうを見ている。まるで、次の案を出せと強要しているように。

「アインとか？」

と、帝督が提案するが、厨二臭いです、と酷評をもらった。  
ダークマター 未元物質の顔も引きつった。



## 第七話（後書き）

これ以上キャラは増えません。  
・・・たぶん。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1598q/>

---

けんきゅう

2011年7月11日12時53分発行